

スポーツにおける成績優秀者のロールシャッハ・反応

中 込 四 郎・井 篁 敬
市 村 操 一・関 岡 康 雄

Rorschach Responses of High Performers in Sport

Shiro Nakagomi, Takashi Ino, Souichi Ichimura and Yasuo Sekioka

This study offered the materials of Rorschach responses of high performers in sport and the general features of their responses. The subjects were thirty-two high performers. The most of them were representative athletes took part in the 5th world Soft Tennis Championships and the World University Games (track & field) at Edmonton, Canada. The Rorschach test was individually administered to the subjects and scored according to the method developed by Kataguchi.

By means of comparison between high performer's scores and normal adult's scores in each Rorschach scoring category the following results were found to be characteristic of our subjects. The subjects showed high W%, F+% and ΣF +% and many FM and few C, and tendencies of $M > \Sigma C$ and $FM + m > Fc + c + C$.

The results suggested that the high performers had general personality traits in which high competitive need and high level of aspiration were remarkable, and they showed introversive tendency in according to experience balance. And they were somewhat repressive in their approach to outer world, while in intrapsychic world were active and had abundant psychic energy not fully accepted by the subjects at this time. Hence they represented a potentiality.

本研究は、スポーツにおける成績優秀者 (high performer) ^{#1}のロールシャッハ・反応 (以下ではロ・反応とする) に関する資料を提供し、そしてそれらの結果に対して若干の意味づけを試みることを目的としている。

ここで行われる研究は、これまでに数多く報告されてきている、「スポーツとパーソナリティ」と言われるような領域に集約されるものといえる。スポーツマンのパーソナリティに関しては、かならずしも統一見解がなされてはいないが、花田、竹村、藤善 (1968)²⁾の主張する“スポーツマン的性格” (情緒的安定、外向的、やや衝動的) を支持する報告が多いように見受けられる。そして、スポーツにおけるいわゆる一流選手のパーソナリティに関する研究においては、選手たちの高い競

技動機の水準を裏づけるような結果を出しているものが多いようである³⁾⁴⁾¹⁰⁾。ところがこのような研究情況にありながら、諸々の理由からこれまでに投影法 (projective method) を用いて研究を進めた者は少なく、さらにその対象を成績優秀者に限定してみると、非常にわずかであることがわかる。

一方最近では、単にスポーツマンの一般的なパーソナリティを論じるといった着眼ではなく、スポーツ場面を反映した独自のインベントリーを開発し、運動選手の特定行動との関係や、心理適性についての研究が行われるようになってきているようである。このような研究の背景では、それまでに使用されてきた心理テストのテスト刺激としての内容と、適用される situation (スポーツ場

面)との間に具体的な一致度が少ないといった方法論的限界を主張しているようである。ここで用いられるロールシャッハ・テスト (Rorschach test: 以下ではロ・テストとする)も上述の意味からの一致度は低く、一般的な次元からのスポーツ選手やスポーツ行動の理解・予測を旨としている。しかしながら、ロ・テストにおける人格理解は、最も基本的なわれわれの知覚の選択性という働きを手がかりとしており、スポーツという特殊な事象に参加していると言えども、人格 (person) における普遍的な水準での一致を求めることができるはずである。また、これまでに報告されてきている質問紙を中心とした静的な人格理解ではなくロ・テストにおいては、より力動的な解釈を試みることが可能となるはずである。このことによって、スポーツにおけるパーソナリティ研究の接近法としての personologism の適用拡大を図るのではないかと考えられる。もちろん、ロ・テストがより事例的に活用されるならば、そのことはさらに明らかになるはずである。

以上のような理由から、スポーツにおける high performers に対して、ロ・テストが施行されることになった。

方 法

対象者 本研究の対象者は、陸上競技並びに軟式テニスにおける成績優秀者より構成されている。

陸上競技選手は1983年ユニバーシアード・エドモントン大会出場者17名 (男子15名、女子2名)と、日本記録保持者2名 (女子)である。そして、軟式テニス選手は1983年第5回世界選手権大会出場者12名 (男子6名、女子6名)と、57年度全日本ランキング9位者1名 (一般女子)である。全対象者32名の平均年齢は、23.4歳 (18歳—33歳)である。前者は学部学生並びに大学院生が中心になり、後者は実業団チーム所属者である。

手続 本対象者に対して、個別にロ・テスト (スイス原版) を施行した。施行法並びに分類記号化は、片口法⁶⁾に従って行われ、さらに個々のスコアを片口の基礎整理表に基づき集計が成された。ここでは選手個々の人格像をロ・テストより深く探るのではなく、また性差・種目差の検討をも加えていない。スポーツの領域での成績優秀者であるといった共通側面にに基づき、同一集団として分

析・検討を加えた。

実施期間 本研究の対象者に対するロ・テスト実施の期間は次のとおりである。陸上競技選手に対しては、1983年5月下旬より6月上旬にかけて行なわれた調整合宿期間に主に実施された。そして、軟式テニス選手に対しては、1983年7月中旬から8月上旬の調整合宿期間、及び職場への個別訪問によって実施した。これらの時期は両種目とも、本大会開催前である。(陸上競技代表選手1名は、大会後の7月下旬に実施した。)

結果と考察

片口の基礎整理表に従い、各対象者のロ・反応プロトコルに対するスコアリングの結果を Table 1, Table 2 に示した。また、主なスコアリングカテゴリーに関する、全対象者の M, SD を求めたものが Table 3 である。

本来ロ・テストは個別に施行し、そして個別に解釈を進めていくことによって、心理テストとしての個性的機能をより多く発揮するものである。このようなことは、Table 1, 2 に示されている各スコアの対象者間の相違に対して詳細に見ていくと明らかになる。しかしながら、ここでは前述した研究目的より、スポーツにおける成績優秀者集団のロ・テスト資料を提供し、そして片口⁶⁾、Klopfer⁷⁾等の報告する一般正常成人の平均値と比較し、本対象者たちの特徴的なところを抽出することになる。

まず、反応数 (R)、反応時間 (RT)、そして反応領域に関するスコアリングにおいて注目されることは、W% の高いことである。一般にわが国の正常成人の値は高く、W 優位の傾向を示すと言われるものの、本対象者の多くのものはその平均値 (片口: 39.0%, Klopfer: 20~30%) をはるかに上回っているようである (M=64.7%, SD=16.23)。また、S (空間) 反応に関する Table 1, 2 に示す S% は主反応領域としての S の R に対する割合であるが、他の反応領域との結合による付加的なもの (付加 S には、0.5 のウエイトを与えた) を加えてみると (Table 3)、やや高い傾向にあることがわかる。これらのことから、本対象者たちの競争意欲、並びに要求水準が高いといった特徴的な側面を推測することができる。この事は Johnson, W. R. et al (1954)⁸⁾ が主張する知的野

Table 1 Rorschach scores of each high performer (track & field)

No. of subjects, sex and age	1 ♂, 22	2 ♂, 23	3 ♂, 22	4 ♂, 23	5 ♂, 18	6 ♂, 23	7 ♂, 22	8 ♂, 20	9 ♂, 22	10 ♂, 26	11 ♂, 23	12 ♂, 20	13 ♂, 24
R	17	29	39	22	12	16	19	15	38	23	36	21	16
RT(Av.)	2'30"	1'04"	2'13"	1'14"	1'19"	1'11"	1'23"	1'02"	60"	37"	1'38"	38"	53"
R ₁ T(Av.)	12.6"	10.1"	7.7"	17.0"	48.2"	31.1"	15.8"	35.5"	5.1"	13.4"	9.4"	7.2"	38.7"
R ₁ T(Av. N.C)	12.6"	5.0"	8.0"	23.2"	57.0"	33.6"	14.8"	34.2"	3.8"	12.8"	7.0"	7.8"	22.8"
R ₁ T(Av. C.C)	12.6"	15.2"	7.4"	10.8"	39.4"	28.6"	16.8"	36.8"	6.4"	14.0"	11.8"	6.6"	54.6"
W : D	7 : 8	19 : 8	10 : 24	11 : 10	9 : 1	11 : 4	14 : 4	10 : 4	28 : 8	7 : 13	31 : 3	17 : 4	12 : 4
W%	41	66	26	50	75	69	74	67	74	30	86	81	75
Dd%	6	7	10	0	17	6	5	0	3	13	3	0	0
S	6	0	3	6	0	0	0	7	3	0	3	0	0
W : M	7.5 : 2	19 : 1.5	10.5 : 8.5	11 : 4	9 : 2	11 : 3	14 : 4.5	10.5 : 5	28 : 6.5	7 : 2.5	31 : 1	17.5 : 4.5	12 : 2
ΣC : M	1.25 : 2	0.75 : 1.5	2.5 : 8.5	0 : 4	0.5 : 2	0.75 : 3	0.5 : 4.5	1.5 : 5	5.75 : 6.5	1.5 : 2.5	5.75 : 1	2.5 : 4.5	2 : 2
Fc+c+C : FM+m	1 : 4	0 : 5	0.5 : 5.5	0 : 2	0 : 7.5	0.5 : 4.5	2 : 2.5	1.5 : 3.5	3 : 7	1.5 : 0	4 : 11.5	1.5 : 1	2 : 2.5
VIII+IX+X/R	35	28	49	32	33	38	21	40	39	22	33	38	38
FC : CF+C	0.5 : 1	1.5 : 0	5 : 0	0 : 0	1 : 0	0.5 : 0.5	0 : 0.5	0 : 1.5	3 : 4	1 : 1	2.5 : 3	3 : 1	1 : 1.5
FC+CF+C:Fc+c+C	1.5 : 1	1.5 : 0	5 : 0.5	0 : 0	1 : 0	1.0 : 0.5	0.5 : 2	1.5 : 1.5	7 : 3	2 : 1.5	5.5 : 4	4 : 1.5	2.5 : 2
FM : M	3.5 : 2	3.5 : 1	4.5 : 8.5	1.5 : 4	7 : 2	4 : 3	2 : 4.5	3.5 : 5	5.5 : 6.5	0 : 2.5	8.5 : 1	1 : 4.5	2.5 : 2
F% / ΣF%	59/94	76/97	54/100	77/100	17/100	63/100	58/100	40/100	53/95	70/91	47/89	57/100	50/88
F+%/ΣF+%/R+%	70/81/76	91/93/90	90/95/95	94/95/95	50/92/92	90/94/94	91/95/95	83/93/93	75/78/74	93/95/87	88/84/75	100/100/100	88/93/81
H%	29	17	28	27	17	25	42	33	26	17	2	33	13
A%	47	45	38	50	67	44	47	53	34	43	61	38	56
At%	0	3	0	0	0	6	0	0	5	13	0	5	6
P (%)	3(18)	9.5(33)	5(13)	6.5(30)	4(33)	5(31)	8(42)	4(27)	4(11)	5(22)	4(11)	4(19)	5(31)
Content Range	6	9	7	7	4	5	4	4	11	9	11	5	7
Determinant Range	5	6	5	3	4	4	4	4	7	5	8	6	6

Table 1 Continued

No. of subjects, sex and age	14, ♂, 22	15, ♂, 23	16, ♀, 18	17, ♀, 20	18, ♀, 20	19, ♀, 18
R	49	12	12	20	23	16
RT(Av.)	1'59"	1'07"	1'09"	51"	41"	43"
R ₁ T(Av.)	7.3"	19.0"	13.0"	13.2"	9.1"	9.5"
R ₁ T(Av. N.C)	5.0"	21.0"	9.8"	10.4"	8.6"	6.6"
R ₁ T(Av. C.C)	9.6"	18.8"	16.2"	16.0"	9.6"	12.4"
W : D	32 : 13	8 : 4	9 : 2	16 : 2	16 : 5	9 : 7
W%	65	67	75	80	70	56
Dd%	6	0	8	5	9	0
S%	2	0	0	5	0	0
W : M	32 : 3	8 : 4	9 : 5	16.5 : 3	16 : 4	9 : 4
ΣC : M	2 : 3	1 : 4	2 : 5	3 : 3	1 : 4	0 : 4
Fc+c+C : FM+m	1.5 : 19	1.5 : 3.5	2.5 : 6	3 : 6.5	1 : 9	0 : 5.5
VIII+IV+X/R	37	42	33	25	30	44
FC : CF+C	3 : 0.5	1 : 0.5	2 : 1	0 : 3	2 : 0	0 : 0
FC+CF+C:Fc+c+C	3.5 : 1.5	1.5 : 1.5	3 : 2.5	3 : 3	2 : 1	0 : 0
FM : M	16.5 : 3	3 : 4	5 : 5	4 : 3	7 : 4	4 : 4
F%/ΣF%	49/98	25/100	0/92	30/80	30/100	50/100
F+% / ΣF+% / R+%	83/90/88	100/100/100	0/91/83	83/94/75	100/100/100	88/94/94
H%	10	50	33	30	22	25
A%	65	33	50	40	57	75
At%	2	0	0	0	0	0
P (%)	10.5(21)	5(42)	3(25)	4(20)	8(35)	6(38)
Content Range	9	4	4	7	3	2
Determinant Range	6	5	5	7	7	3

心が高い (high level of intellectual aspiration) といった側面を支持することになる。そして、S 領域への反応がやや高いことから知的反対傾向とも言うべき、自己を取り巻く外界のわく組に対して批判、反抗、ないしは攻撃的傾向を内に秘めるような自己主張が感じられるようである。恐らく、ロ・反応から特徴づけられるこのような側面は、スポーツの場における成績優秀者としての心理的エネルギーの一つとして機能していると思われる。これらの結果に対する意義づけはさらに、Conforto, M. & Marcenaro, M. (1979)¹¹が行っている、心理防衛的並びに心理補償的観点 (psychodefensive and psychocompensatory) から進められることが考えられる。つまり、彼等の心理的特性が、かかわり合っている競技的スポーツとの関係の中で、どのように適応を求めているかを明らかにすることは、選手理解のうえで大切なことのようなものである。しかしながら、そのような方向に解釈を進めるためには、他からの情報も必要になってくるはずである。また、本研究のような形式分析だけでは限界があることから、今後の課題としなければならない。やや付け加えるとす

ると、W% ↑, S ↑^{※2}, W > 2M であるといった特徴は、上述のような人格像が推論されると同時に、もし本対象者たちが心理的不適応を示していくとすると、逆にこのようなパーソナリティ側面が引き金になることが考えられるかもしれない。つまり、外に対する強さである反面、内に対しては脆さとなりうることも考えられるようである。

次に決定因に関する特徴的なところに触れてみることにする。M (人間運動反応), FM (動物運動反応) といった運動反応が総じて高く、しかも FM > M の関係にある者が半数近く出現していることも注目されるようである。また、Table 3 に示す C (色彩反応) に関して、付加反応も加えた色彩の反応総数 (FC + CF + C) の平均値 2.3 は、これだけをとりてみると標準値よりやや低いと位置づけられるにすぎない。しかしながらこの値は、対象者 3, 9, 11, 29 といった一部の者の C 反応数の多さに負うところが大きいことから、本対象者の特徴として C ↓ 傾向を付け加えてもよいようである。さらにこのような M, FM, そして C を中心とした反応結果は、体験型 (experience balance) にも表われてくることが予想される。M > ΣC の関

Table 2 Rorschach scores of each high performer (soft tennis)

No. of subjects, sex and age	20- ♂, 33	21- ♂, 28	22- ♂, 33	23- ♂, 32	24- ♂, 27	25- ♂, 26	26- ♀, 22	27- ♀, 22	28- ♀, 22	29- ♀, 23	30- ♀, 23	31- ♀, 23	32- ♀, 27
R	23	12	12	26	23	45	26	24	19	36	37	11	31
RT(Av.)	49"	45"	1'08"	1'16"	1'02"	2'59"	2'16"	1'07"	1'03"	31"	1'20"	47"	1'18"
R ₁ T(Av.)	15.2"	26.3"	24.2"	23.6"	30.0"	17.3"	59.4"	12.6"	17.3"	5.6"	5.7"	11.4"	9.3"
R ₁ T(Av. N.C)	11.4"	21.0"	29.8"	22.2"	38.5"	16.2"	53.0"	5.4"	16.2"	7.8"	4.8"	8.4"	9.4"
R ₁ T(Av. C.C)	19.0"	30.6"	17.3"	25.0"	21.4"	18.4"	65.8"	19.8"	18.4"	3.4"	6.6"	14.4"	9.2"
W : D	16 : 6	9 : 3	9 : 2	20 : 5	12 : 10	25 : 16	16 : 9	11 : 13	17 : 2	12 : 18	27 : 5	9 : 1	16 : 11
W%	70	75	75	77	52	56	62	46	89	33	73	82	52
Dd%	4	0	0	4	0	4	4	0	0	17	8	9	13
S%	0	0	8	0	4	4	0	0	0	0	5	0	0
W : M	16 : 2	9 : 2	9 : 0	20.5 : 2	12.5 : 2	25 : 0	16.5 : 2	11 : 1	17 : 0	12 : 2	27 : 6	9 : 2	16 : 5
ΣC : M	0.5 : 2	0.75 : 2	2 : 0	3.25 : 2	2 : 2	1.5 : 0	0.25 : 2	1.5 : 1	2.25 : 0	5.25 : 2	4.25 : 6	0.75 : 2	1.75 : 5
Fc+c+C:FM+m	1 : 3.5	1.5 : 2.5	2.5 : 1	2 : 3.5	3 : 6	2 : 14.5	4 : 11.5	4.5 : 2.5	0.5 : 7.5	5 : 6	1 : 6	0 : 2	4.5 : 2
VIII+IX+X/R	26	25	17	27	39	29	31	33	32	25	22	27	32
FC : CF+C	0 : 0.5	0 : 0	0 : 2	2.5 : 0.5	4 : 0	1 : 1	0.5 : 0	0 : 1.5	0.5 : 0.5	1.5 : 4.5	2.5 : 3	0 : 0	1.5 : 1
FC+CF+C:Fc+c+C	0.5 : 1	0 : 1.5	2 : 2.5	3 : 2	4 : 3	2 : 2	0.5 : 4	1.5 : 4.5	1 : 0.5	6 : 5	5.5 : 1	0 : 0	2.5 : 4.5
FM : M	0.5 : 2	2 : 2	1 : 0	3.5 : 2	6 : 2	13.5 : 0	11 : 2	0 : 1	5 : 0	4.5 : 2	6 : 3	2 : 2	0.5 : 5
F% / ΣF%	78/91	42/100	67/92	58/96	48/100	60/96	38/100	63/92	58/84	50/81	62/92	64/100	61/94
F+%/ΣF+%/R+%	89/90/83	80/75/75	75/82/75	100/100/96	91/96/96	81/83/78	90/92/92	80/86/79	73/81/68	94/90/72	96/94/86	71/82/82	95/93/87
H%	26	25	8	12	22	4	15	21	5	17	38	18	35
A%	26	58	58	42	61	56	77	58	53	44	38	64	42
At%	0	0	17	0	0	2	0	0	11	3	0	9	0
P (%)	3.5(15)	3(25)	4(33)	6(23)	6(26)	4(9)	6(23)	6(25)	3(16)	5(14)	8(22)	7(64)	7(23)
Content Range	11	4	5	7	3	11	4	5	8	11	8	4	7
Determinant Range	4	5	4	7	4	6	6	7	4	7	6	3	6

Table 3 Means and standard deviations of Rorschach scoring categories

	M	SD		M	SD
R	23.6	10.35	C(FC+CF+C)	2.3	1.90
R ₁ T(Av.)	18.2	12.92	C'(FC'+C'F+C')	1.1	1.11
W%	64.7	16.23	c(Fc+cF+c)	0.8	0.86
S	1.8	1.32	F+%	86.1	10.94
F	12.8	6.87	ΣF+%	90.1	6.70
M	3.0	1.96	H%	22.7	11.20
FM	4.4	3.76	A%	50.6	12.14
m(Fm+mF+m)	1.0	0.99	P(%)	5.4(25.6)	1.92(11.22)

係にある者が多く、さらにこのような本対象者の内向性 (introversive) の傾向は、FM+m>Fc+c+C'といった本人によって完全には認知されていない、言うなれば一つのポテンシャルティを示す水準での体験型⁹⁾はさらにそれを強め、そして特徴づけているようである。

これまでの結果をそれぞれの記号に付された解釈仮説に従って、一般的な意味づけを行ってみることにする。体験型が内向性を示すことから、自分自身の価値体系や要求に関連した世界を再構成する傾向があり、外界からの働きかけに対して積極的に応じたり、あるいは外部からの刺激によって大きく動かされる方ではないことが考えられる。そして、このような内向傾向はさらに、本人にとって十分受容されていない意識下の体験型においてもそれ以上に認められ、内界での心的エネルギーの動きの大きいことがわかる。特にFMの値より、未分化なエネルギーが強く、生理的な弾力性ないしは生命力の強さをうかがうことができる。これらの側面は、内的コントロールの指標とされるMの存在や現実検討能力 (F+%↑, ΣF+%↑) によって、無目的な衝動性と直接結びつくことなく、本対象者たちにおいては、スポーツ場面での目的を持った攻撃性、闘争性へのエネルギーの背景となっているのであろう。

上述してきた結果に対して見方を変えると、ここに集まってきたhigh performersは、外界に対してやや固さがみられ、そして内界においては動きが活発であることが特徴として考えられるようである。このような事の一部に対する裏づけとして、片口 (1966)⁹⁾による反応の量 (R) と質 (ΣF+%) の関係から描かれる分布図が参考となるようであ

る⁹⁾。Fig. 1より、分布状態がA~Dの4つのゾーンのうち、B、Cゾーンに固まっていることがわかる。本対象者がいづれも精神的疾患をもった者でないことから、RとΣF+%から成る軸の交点付近ないしは、R軸よりも左側のゾーンに分布してくるのは当然予想されることであろう。しかしながら、さらに両ゾーンを比較してみると、B<Cの関係にあることが認められてくる。「まだ実証的な裏づけは不十分であるが」と片口は前置きをしているが、このCゾーンに対して、「～、プロットの形態特徴を的確につかんでいるが、観念活動は自由な展開を示さないような場である。慎重すぎて、のびのびとしていない、何かこだわりのある人びとがここに入ってくる。抑制の強すぎる人、抑うつ的な気分の人、几帳面すぎる人などが、このゾーンに多い。」と、意味づけを行っている。もちろんこのような意味づけの全てを直接当てはめるわけにはいかないと思われる。本対象者の多くが、わが国の代表選手であるといった社会的側面を持っており、この事が広義のロールシャッハ行動にも影響していたことは考えられる。

これまで述べてきた外界からの働きかけに対する反応性が低いということは、ひっこみ思案、内気すぎるといった側面と直接結びつくのではないようである。恐らく、W優位な体験様式であることから、彼等の表面的な行動レベルでの自発性や思考の自由さが感じられないのであろう。つまり、物事をより良いものに、あるいは完全なものにといった意欲的、要求水準が高いことから、外界に対する働きかけの幅を狭めることになり、そのことが固さを導き出しているのであろう。

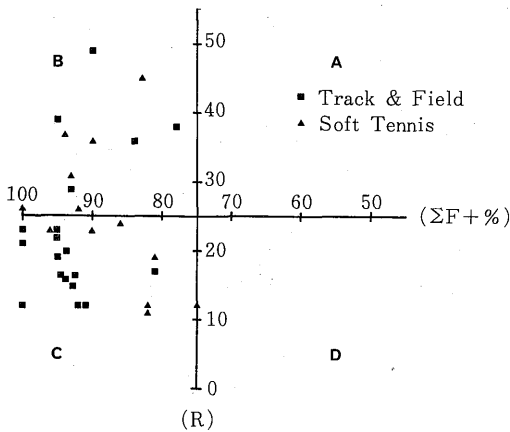


Fig. 1 A feature of each subject about relationships between quality ($\Sigma F + \%$) and quantity (R) of Rorschach response.

最後に、形態水準について若干ふれてみることにする。F + %, $\Sigma F + \%$ ²⁴のいずれも値が高く現実検討能力にすぐれていることがわかる。ところが両者の関係について検討を加えると、その差は顕著ではないが、 $F + \% < \Sigma F + \%$ の関係にある者が多いことに気がつく。今のところこのような方向性に対する意味づけがなされていないことや、両者がともに正常範囲であることから、ここで断定的な解釈を下すことは避けねばならない。やや補足的な情報として、F反応に対する質問段階での本対象者たちのロ・反応プロトコルの中に、「とにかくこれは～という感じ」、「どこにどこってではなく全体に～」、「(目の他に、例えば～)：そういうのはあまりイメージに浮かばなかった」といった表現があり、このことがスコアリングの段階での形態水準を下げる原因の一つになっていた。両形態水準のスコアリングの背景となる観点や一部のロ・反応プロトコルよりみられた反応過程から、刺激価の低い限定された状況に対する関与の方が、変化に富んだ状況に対してよりも低いと言えるようである。つまり、状況により本対象者たちがとりうる行動は、質的に異なることが予想され、自己をより個性的に表出できる対象への働きかけの方が強いということになる。

以上、反応領域並びに決定因を中心に、一般正常成人の統計値を基にして、本対象者たちの特徴的なところを探ってきた。しかしながら、スポーツ選手のロ・反応に対する解釈をより妥当性の高いものにするために、そこでの統計的基準の設定、考え方に際して、彼等の生活環境や文化的背景といった諸条件を考慮する必要がある。そのためにも、さらにスポーツ選手を対象としたロ・テスト施行の経験を増やし、データの蓄積が要求される。また、ロ・反応プロトコルより導き出された個々のスポーツ選手の人格像と選手自身並びにコーチングに当たっている人たちからの情報との対応を図り、スポーツ場面での具体的な行動に、どのようにロ・テスト状況での体験様式が反映されているかを確かめていく必要がある。両立場からの情報は相互補完的であることは言うまでもないが、上述のようなことを通して、ロールシャハ法が個々のスポーツ選手への理解を深める一つの接近法としての有効性を高めていくことができると思われる。

まとめ

本研究では、陸上競技並びに軟式テニスにおける成績優秀者 (high performer) にロ・テストを施行し、個々のロ・反応資料を提示した。そして、正常成人の値と比較され、 $W\% \uparrow, FM \uparrow, C \downarrow, M > \Sigma C, FM + m > Fc + c + C', F + \% \uparrow, \Sigma F + \% \uparrow$ であることが特徴として認められた。このような結果に対して、本対象者たちが一般的に競争意欲や要求水準が高く、体験型においては内向性傾向を示していると解釈した。外界に対してやや固さがみられる反面、精神内界は活発であり、意識下での心理的エネルギーの豊かなことが認められた。

本研究の結果に対しては、限られた観点からの形式分析のみにとどまり、さらに個別に内容分析、継列分析へと解釈の幅を広げねばならない。また、データの蓄積と同時に、対象群 (例えば、成績水準の異なる選手群、他領域における high performer) を設けることも必要となる。

本研究の対象者として御協力いただきました選手の方々、並びにロ・テスト実施にあたり、何かと御配慮をいただきました東京工業大学石井源信

先生に深く感謝いたします。

注1 これらの対象者に対して, top-level athletes, champion level athletes, high-level competitors, superior athletes, highly successful players etc 様々な呼び名が使用されてきている。本研究では, 対象者に対して十分な基準を設けたわけではないが, 個々の競技種目でわが国を代表する競技能力を保有している者であるといった観点から, 成績優秀者 (high performer) として選ばれた。

注2 本文中に示した“↑”は, 正常成人の平均値よりもその値が高い傾向にあることを意味している。“↓”はその逆を意味している。

注3 この分布図の縦軸R (反応の量), 横軸 $\Sigma F + \%$ (反応の質) の交点に対して, その後片口は修正を行っている ($R = 23$, $\Sigma F + \% = 63$ で直交させている)。しかしながら, 本研究者等は経験的に, 修正以前のもの ($R = 25$, $\Sigma F + \% = 75$)の方がスポーツ選手には適当であると判断した。

注4 $F + \%$ は純粋良形態反応率であり, $\Sigma F + \%$ は一次的良形態反応率である。前者は比較的限定された状況における自己統制や現実吟味の程度を示すとされ, 後者はより開かれた変化に富んだ状況における, 自己統制や現実吟味の程度を示すと言われている。両者の関係は, 通常 $F + \% \approx \Sigma F + \%$ ないしは, やや $F + \% > \Sigma F + \%$ の関係が予想されるはずである。

引用・参考文献

1) Conforto, C.M. and Marcenaro, M., Psychometric and psychodynamic investigation of the person-

- ality of tennis players, *Int. J. Sport Psychology*, 10-4 : 217-30, 1979.
- 2) 花田敬一ほか, スポーツマンの性格, 不昧堂出版, 1970
 - 3) Johnson, W.R., Hutton, D.C. and Johnson, G.B., Personality traits of some champion athletes as measured by two projective tests : Rorschach and H-T-P, *Research Quarterly*, 25 : 484-85, 1954.
 - 4) Kane, J.E., Personality and physical ability, *Proceedings of the 1st International Congress of Sports Psychology*, pp. 772-775, 1965.
 - 5) 片口安史「ロールシャッハ法-その断片的考察」井村恒郎ほか編, 異常心理学講座(2)心理テスト, pp. 45-94, みすず書房, 1966.
 - 6) 片口安史, 新・心理診断法, 金子書房, 1974.
 - 7) Klopfer, B., Ainsworth, M.D. et al., *Developments in the Rorschach technique. I : Technique and theory*, New York : World Book, 1954.
 - 8) Klopfer, B. and Davidson, H.H. (1962), *The Rorschach technique -An introductory manual-*, 河合準雄 (訳), ロールシャッハ・テクニック入門, ダイヤモンド社, 1964.
 - 9) 日本体育協会・スポーツ科学委員会「スポーツ選手の心理的適性に関する研究」第1報~第4報, 日本体育協会スポーツ科学研究報告, 1980~1982.
 - 10) Ogilvie, B.C., Psychological consistencies within the personality of high-level competitors, *J. of American Medical Association*, 205-11 : 146-62, 1968.